

## 温故知新

森 藤 真 成  
(1969 年度 D)

「人間は不定期の執行猶予を与えられた死刑囚である。・ ・ ・」, このショッキングな言葉をお聞きしたのは、筆者が関学英文学科三年生の頃、矢本貞幹先生（1909. 1. 11～1990. 11. 25）ご担当イギリス文学史の講義を受けていたときだった。以来、この言葉が脳裏に焼き付いて離れたことがない。

もっとも、当時、この血気盛んな青二才学部生には、あのお言葉、——大学紛争中に教職員一同が手分けして上ヶ原キャンパスを見回り巡回した折、矢本先生がふと漏らされたキャンパス評「緑の多い学校だ!」、も当若輩の耳朶を打つには至らずそのまま聞き流していたのだが、事程左様に、矢本先生諭すその名言も、青春の血が熱過ぎた当へな猪口青年の耳朶にはあまり響かず受け流して、真面目に真剣に考えることをせず打ち捨てていた。

が、どういうものか、この言葉は、以降、心の片隅に引っ掛かり、妙に忘れ難い謎言葉となった。

矢本先生には、関学大学院で、修士・博士と合計五年間、ご指導を賜ったのだが、関学大学院へ進学して矢本先生の膝下に居て「講筵に列る」ようになったのは、今思えば、その謎言葉から暗々裏の手引きを受けたから、かもしれない。

その謎言葉と真剣に向き合うことになったのは、遙か後のこと、関学大学院矢本ゼミを修了し、専任助手になり、助教授を経て教授となり、矢本先生ご自身は理事であられた日本ペイター協会の会員になってからのことだった。同会会誌『ペイター論集』に論文<sup>1</sup>寄稿の準備をしているときだった。いろいろ調べるうちに、その謎言葉は、薄々気付いてはいたが、実はウォルタ

ー・ペイターの名著『ルネサンス』に納められたあの有名なる「結論」中の、かの名言であることを知った。かつ、よりよく知った、元々はヴィクトル・ユゴーの名言であることを。さらに、いっそうよく知った、ユゴーの名言にはペイターの有名なる重要付言のあることを。即ち、

我々は或る期間生きてゐて、やがて我々が何時もゐた場所から消える。  
 (中略) 最も賢い人々は歌と藝術で過す。何故なら我々に出来る唯一のことは、その期間をなるべく擴大して、豫定された時間内になるべく多くの脈動を得ることだからである。(中略) 藝術自體の為に藝術を愛好すること(中略) 藝術は、過ぎて行く瞬間に、又それ等の瞬間のためだけに、最高の価値のみを與えることを率直に約束する(後略)<sup>2</sup>。

文中、波線部のことを、矢本先生は、「瞬間を充実して生きる」と仰ったように記憶する。

或る時、矢本先生は杉山洋子先生と歓談しておられた、杉山先生「人間、死んだらおしまいよ」、矢本先生「いや、何か、ある！」。

その矢本先生には、時間に関して一つの興味尽きない癖がおありだった。しょっちゅうと言っていいほど、左の袖口を捲っては腕時計を引き出され、そっと時刻をご覧になるのであった。あのしぐさは今でも髣髴する。

「批評界の大物」と畏敬された矢本先生の批評研究は、その偉業ぶりを、夏目漱石の次なる評言に見出すことができる、

元來人の説を聚めて紹介するのを平凡だとか才氣がないとか云ふが是は大なる誤解である。多くの書物を讀んで之をよく分る様に紹介するのは一種の技能である。<sup>3</sup>

その矢本先生の批評観は、端的には先生訳注ポーブの『批評論』に見出し得る、「批評ということが創作に劣らず大切であること」に。<sup>4</sup>

さらに、批評への誘いを矢本先生はこう書いて呼びかけられた、「作品がいくつも書かれてから、それに対する反省が起り、そこから批判が生じてくる（中略）それゆえ批評とは文学の自覚といえる（中略）しかし現代のわが国ではイギリスの評論を読む人がまだ少ないようである。読者諸君、心がけて読もうではありませんか」と。先見の明ある人の、力強くもまたやさしいお導きである。

その矢本先生がご自身、批評研究に志されたのには特筆すべき重要な出会いがあった。一つには、漱石の評論作品との奇しき出会いにあっただろう。矢本先生のお言葉によると、「そのころ（「戦時中」）小宮豊隆先生の指導によって岩波版『漱石全集』十八巻の「總索引」を作製する仕事に加わって『文学論』や『文学評論』などをくりかえし読むことになった<sup>7</sup>」。

小宮豊隆によれば、その「總索引」「作製者」の一人が「矢本貞幹」先生であった。小宮はこう書いている「作製者は是を作製するのに、一切の労力と時間とを傾け悉した（中略）許された時間の中で、精一杯働いたのである<sup>8</sup>」と。こうして、矢本先生の批評研究は礎の一端が固められたのであろう。

**Man is mortal.** の意識を片時も忘れないとの印象が強烈な矢本先生は漱石がお好きであったが、その漱石が「死」についてかの小説中にこう書いている、

「人間萬事夢の如しか、やれ〜」

「只死と云ふ事丈が真だよ」（中略）<sup>まこと</sup>

「死に突き當らなくつちや、人間の浮氣は中々已まないものだ」<sup>9</sup>

人生のこの厳然たる事実・真実を悟り切った矢本先生、忠実なペイタリアン、は達観ぶりをこう書いておられる、「しかし誰でもうつし身の形骸は結局空しいものである。暫しでものこるのはその人の仕事、即ち学者ならば研究上の業績である。のこされた後進の者はそこからめいめいの研究に対す

る刺戟を感じ取って進むのが、故人に対する義務であろう<sup>10</sup>」。なお、この波線部は、何気なく書いてあるようだが本当は由緒ある一句に由来する。その由緒ある一句は、有名な以下の一句が代弁してくれている、

*“L’homme c’est rien—l’œuvre c’est tout,” as Gustave Flaubert wrote to George Sand.*

『人は空しい、業績がすべて<sup>11</sup>』。

その矢本先生が早くも青春時代にして死に悟入なされていたとは、実に驚きだ、

ね が い

この人生と別れる時に

願わくは

最後の帽子をとって

「やさしかった人生よ さようなら」と

父母の消えた霧の彼方へ歩いてゆきたい

名をのこすような仕事をのこさず

私の生きていたということも

やがて雪のように消えるだろう

誰からも感謝されないだろうが

誰にも迷惑をかけないで

つゝ、ましく生きたことを喜んで

「人生よ これでお別れだ」

そんな心の準備をしろと

すでに青春をすぎた私は

私に向って言いきかせるのだ

——二十五才の誕生日に——<sup>12</sup>

病気も大分回復して此の頃は書齋にすることが多くなりました。夜中に目をさまして芦屋の海までつづく広い空を眺めながら二人で昔話をしています。

星一つ見えて寝られぬ霜夜哉 漱石

一九八八年 秋

<sup>13</sup>  
信子

### 白骨の会話（前略）

でもあと何年居られるかしら

そうだ そうだ そのうち風化するね

風化？ 風化したらどうなるの

こゝから空へ引越すことになるだろう

まあ ばらばらになるんじゃない？

元素になって空中を飛ぶんだよ

楽しそうだね<sup>14</sup>

補遺「（前略）若い人は、人生の時間に限りがあることを意識して仕事に取り組んでほしい。そのためには、自らを追い込むことも必要だろう。その厳しさに耐えられる者だけが、死後まで残る業績を上げられるのだ。」<sup>15</sup>

「華容儉年賊 鶴髪不禎祥 古人今不見 今人那得長」（空海『慕仙詩』）

註

- 1 拙論「Walter Pater の ‘the vraie vérité’」『ペイター論集』第五号、日本ペイター協会、2009 年（平成 21 年）、21-46 ページ。
- 2 吉田健一訳『ルネッサンス』角川書店、昭和 23 年。波線部は筆者。
- 3 夏目漱石「序言」『文学評論』。
- 4 アレクザンダー・ポープ原著、矢本貞幹訳注『批評論』英米文芸論双書 3、研究社出版、昭和 42 年、vii ページ。
- 5 矢本貞幹『現代イギリスの文学思想——批評の理論と技術——』研究社、昭和 31 年、366-367 ページ。
- 6 1931（昭和 6 年）年の満州事変、1932（昭和 7）年の五・一五事件の頃か。
- 7 矢本貞幹『夏目漱石——その英文学的側面——』研究社選書、昭和 46／51 年、290-291 ページ。
- 8 小宮豊隆「緒言」『總索引』漱石全集第十九巻、漱石全集刊行會、昭和 12 年。
- 9 夏目漱石『虞美人草』第一章。
- 10 矢本貞幹「志賀さんと私」『英米文学会会報』第 6 号、関西学院大学英米文学会、昭和 30 年。波線部は筆者。
- 11 Sir Arthur Conan Doyle, “The Red-Headed League” 本篇末尾の結句。
- 12 矢本貞幹『詩集 四季転々』同盟印刷、1958 年、61-62 ページ。
- 13 矢本貞幹『漱石の精神』私家版、1988 年、174 ページ。
- 14 矢本貞幹『詩集 四季転々』、73-74 ページ。
- 15 伊東 潤「時間には限りがある」『日本経済新聞』2014 年 11 月 27 日夕刊、7 ページ。

参考文献

- 『アリエス』1935 (Vol. 1, No. 1)-1939 (No. 5)。関西学院大学法文学部英文學會、昭和 10-14 年。「本来、學生中心の研究雑誌」（第 3 号：「編輯後記」）
- 寿岳文章「序」『神曲 地獄篇』集英社、昭和 49 年第 1 刷、昭和 54 年第 5 刷。
- 東山正芳「英文科から英文学科へ そして・・・」『英米文学会会報』第 13 号、関西学院大学英米文学会、昭和 38 年。
- 東山正芳「来し方行く末」『英米文学——東山正芳先生退職記念——』Vol. XX, No. 1, 関西学院大学英米文学会、昭和 50 年 3 月 20 日。
- 東山正芳「詩人・佐藤清の周辺」『関西学院通信クレセント』関西学院創立 90 周年記念特別号, Vol. 3, No. 2 September, 学校法人関西学院, 121 ページ。「佐藤先生から連るこの伝統（注、「門下から寿岳文章、芥川潤、志賀勝の逸材がでたこと）」や、関学図書館における佐藤清文庫成立過程への言及を収録。
- 東山正芳「矢本貞幹『エリザベス朝文学論』」『博士学位論文』内容の要旨と審査結果の要旨、第 9 集、昭和 45 年度、関西学院大学。夏目漱石の響（ひそみ）に倣い博士号授与を拒まれる矢本貞幹先生に対し文学博士の学位授与が極めて妥当・適切なる旨を説いて強く推挙される東山正芳先生の名審査報告。

蛭沼寿雄「東山正芳先生と私」『英米文学会会報』第 37 号、関西学院大学英米文学会、昭和 50 年（筆者訂正、昭和 51 年）3 月 20 日、2 ページ。

藤井治彦他「竹友藻風——その人と学問を語る——」『関西学院通信クレセント』Vol. 8, No. 2, 1984 Winter, 学校法人関西学院, 31-50 ページ。竹友藻風の「思い出」と「御業績」とが藤井、東山、西尾、杉山、笹山、中条の各先生から語られる藻風評の興味尽きない好記録。各先生の肖像も極めて貴重。

毎日新聞阪神支局編「栄光の英文科」『新月ここに——関西学院九〇年——』毎日新聞阪神支局、昭和 58 年。寿岳文章先生「在学当時の勉強ぶり」等を所収。

森藤真成「イギリス小説に見る土地の霊——最終講義に代えて——」『人文論究』第 60 巻第 4 号、関西学院大学人文学会、2011 年、71-108。参照、とりわけ筆者が蒐集して篇末に掲げた、上ヶ原「開創」余話を。

森安 綾「矢本貞幹先生記念論文集発行に際して」『英米文学——矢本貞幹先生退職記念——』Vol. XXI, No. 2, 関西学院大学英米文学会、昭和 52 年 3 月 5 日。矢本先生のエッセイ「なりそこねた『詩人』」を登載。

矢本貞幹「秋晴れの日の記憶」, 「藻風の思い出」『関西学院通信クレセント』Vol. 8, No. 2, 1984 Winter, 学校法人関西学院, 43-45 ページ。竹友藻風の矢本先生評「小宮さんの弟子」と、矢本先生からの藻風先生散歩の勧めを含む。

矢本貞幹「かぶと山の自然」『関西学院通信クレセント』関西学院創立 90 周年記念特別号, Vol. 3, No. 2, 1979 September, 学校法人関西学院, 164-165 ページ。香櫨園フラットの矢本先生宅書斎より遠望し得る甲山の名所感を収載。

矢本貞幹『白骨の想念』東京、木犀書房、昭和 45 年。矢本先生第二詩集。「多くは『死』にかかわる詩である。しかしその中に再生のあこがれを秘めた詩である。」（「あとがき」）

矢本信子「《書斎のあるじ・矢本貞幹氏》机上に天神様」『英語文学世界』外山滋比古編、第 6 巻第 3 号（1971 年 6 月号）、英潮社出版、昭和 46 年、25 ページ。奥様語る矢本先生の貴重なプロフィール：吾不関焉の豪傑具合、を所収。